
お嬢探偵レイナ

エリー・ドーラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お嬢探偵レイナ

【Nコード】

N8948F

【作者名】

エリー・ドーラ

【あらすじ】

父と共に事故に遭い、一人生き残ったレイナ。ところがいきなり幽霊となった父が現れ、レイナは困惑する。お嬢様育ちのレイナと幽霊となった父が織り成す探偵ストーリー

プロローグ

無機質な白い部屋に横たわる若い女性の姿を見下ろしながら、白鳳麗奈は奇妙な感覚を覚えていた。

見覚えのある顔なのだが、はつきりとは思いつけない。

医者と看護師が入れ替わり立ち代わり忙しなく部屋を出入りしている様を眺めながら

傍らでぼんやりと同じ様に若い女性を見下ろしている父親の雄三に

「ねえパパ、この人誰だっけ」

そう聞いた麗奈に雄三は目をむいた。

「誰って……。麗奈、私は常々お前は少しボケたところがあるとは思っていたが

自分の顔も思い出せないのかい？」

ため息混じりに答えた父に、今度は麗奈が目をむいた。

「やだ、うそ。もしかしてアレって私なの。じゃあ、ここに私は何？」

今度は何も答えない雄三に、不安げに麗奈は聞く。

「パパ、私死んじゃったの」

泣き出しそうな声で尋ねる麗奈に雄三は横に首を振った。

そして麗奈に向き合うと

「お前は死んではいないんだよ、麗奈」

そう言ってから

「これからパパの言うことをよく聞きなさい」

と麗奈の目を見つめた。

今まで見たこともないような険しい表情の雄三に、麗奈は怯えた。

麗奈にとって父はいつも陽気で、やさしい表情しか見せたことはなかった。

一人娘の麗奈を溺愛し甘えたい放題を許してきた父の姿は今はない。目の前の厳しい表情の雄三は見知らぬ男に見えた。

麗奈の怯えを察知したのか、雄三の顔が少し緩んだ。

「ああ、ごめんよ麗奈。怖がらせてしまってパパが悪かった」

「うつん、大丈夫」

ようやく答える麗奈に雄三は安心した顔を見せた。

「麗奈、よく聞きなさい。お前はまだ生きているが、私はもう死んでいるんだ」

「えっ」

悲鳴に近い声を出す麗奈に、雄三は静かに続けた。

「私達はドライブの途中で事故に遭ったんだ。覚えているかい」

「そう言われれば、何となく思い出してきたわ」

「だが、この事故は普通の事故とは違う」

「どういうこと？」

「これは私達を殺そうと仕組まれた事故だ」

「やだ、うそ。だって、どうして……」

麗奈の言葉を遮って

「パパにもどうしてかは、今はわからない。しかし車に細工がされてあったのはたしかだ」

父の言葉に顔を歪めながら麗奈は首を振り

「そんな……。これから私達はどうなるの」

と呟いた。

分家とは言え、代々続いた名家の一人娘として何の苦勞も知らずに育った麗奈の行く末だけが

雄三には気がかりだった。

しかし自分が死んでしまった今となつては、もうどうすることも出来ない歯がゆさに

雄三はたまらない焦燥を感じていた。

「麗奈、お前のことがパパは心配だ。もしかするとまたお前の命を狙う者が現れるかもしれん。」

その前にこの事故を仕組んだ犯人を見つけるしかない」

「でもどうすれば……」

「お前はまだ大学生だが、パパの探偵事務所を受け継ぎなさい。そして仕事の側ら、犯人を捜すんだ。お前のことは事務所の探偵たちがきつと守ってくれるから」

「やだ。パパが居なくて私一人でなんて」

半泣きになる麗奈を雄三は強く抱き締めた。

だが、幽体となっている二人の体は虚しくも素通りしてしまう。

「やだ、やだ。本当にもうやだあ……」

子供のように泣きじゃくる麗奈をたしなめるように

「お願いだ麗奈。パパだってお前を残して逝きたくない。でもどうしようもないんだ」

雄三が声を振り絞った。

しゃくりあげ溢れ出す涙を拭い、麗奈は雄三を見つめる。

「パパはもうそろそろ逝かなければならない。麗奈、いつもお前を見守っているから」

どこからともなく現れた柔らかな光の輪が雄三を包む。

光の輪に抱かれて、ゆっくりと姿を消す雄三に麗奈が叫ぶ。

「やだ、パパ！ 行かないで！」

目を開いた麗奈に、60代半ばくらいの女性が涙を溜めて声をかけた。

「麗奈お嬢様！ 助かったのですね！ よかった」

流れゆく空の雲をうつろに眺めながら一日の大半が過ぎていくことに、

麗奈は軽い苛立ちを覚えていた。

父親の雄三と事故に遭ってからすでに一週間が過ぎている。

意識不明ではあったものの、奇跡的に頭部の裂傷ととむち打ち症だけで済んだのは

咄嗟の判断で父が身を挺して自分を守ってくれたお陰だと聞かされた。

しかし一向に事故の真相もわからないまま悪戯に時間は過ぎて行きベッドの上でなす術もなく横たわっていることしか出来ない自分に麗奈は無性に腹が立っていた。

「パパ……」

乳母の松本絹が

「お嬢様、そんなにご自分をお責めになつてはいけません」

「だってばあや！ 私を庇わなければパパだって」

「旦那様は納得されておりますよ。ご自分の下された判断に」

麗奈の手を取り、嗜めた。

絹にしてみれば主人である雄三が亡くなってしまう以上に

小さな頃から仕えてきた麗奈が心に深い痛手を負っていることが悲しいことだった。

麗奈の母親の幸恵がなくなつてから、我が子以上に麗奈に尽くしてきた絹にとって

麗奈がいつまでも悲しみの淵にいるのは耐え難いものなのだ。

「旦那様はとても素晴らしいお方でございました。

その素晴らしい方がこんな形でお亡くなりになるのは、とても悲しゅうございます。

ですが、それ以上に私はお嬢様が助かったことが嬉しゅうございます

す」

「ばあや……」

しばらくしてドアをノックする音と同時に、中年の男が顔を覗かせた。

「大谷のおじさま！」

やあ、と片手をあげて男が笑顔で病室に足を踏み入れた。

「レイナちゃんのご機嫌はいかがかな」

「ねえ、おじさま。あれから何か詳しいことはわかったのかしら？」

尋ねる麗奈に、頭を掻きながら

「うーん、それがね。ブレーキに細工をされていた事は確かなんだが今はそれ以上は……」

と大谷は言葉を濁した。

大谷一夫は警視庁の捜査第一課の刑事で、雄三の大学時代からの友人でもあった。

だからこそ麗奈は大谷の訪問にある程度の期待を抱いたのだ。

しかし現実はその甘くなかったようである。

「そう。今はおじさまにも分らないのね」

「きつと近いうちにレイナちゃんが納得するような報告をするから」

「ええ、期待して待っているわ」

にこりと笑うと、麗奈は俯いた。

「お嬢様、ご気分が」

心配する絹に首を振り、いいえと答えると

「三日後にパパの社葬があるでしょう。ちょっと不安で」

「レイナちゃんも参列するのかい？」

驚く大谷をよそに

「やだ、おじさまったら。私が参列しなくてどうするの」

「いや、しかし……。レイナちゃんもまだ入院しているだろう」

「こんなの。明日にはもう退院します」

さらに驚きを隠せない様子の大谷に絹が冷静な声で、ため息混じり

に言った。

「お嬢様は、こうと決めたら必ずやり通すお方ですから……」
その言葉に大谷は、退院を告げられた医師達がどんなに手を焼いたのか

簡単に想像出来たのだった。

しめやかな空気が流れる中、社葬は滞りなく進行した。

雄三の好きだったベートーヴェンのピアノ曲『月光』が会場に響きそれがまた麗奈の悲しみと寂しさを新たにする。

遺体の損傷が思いの外、激しかったため麗奈は父の遺体とゆっくり対面することもなく、

雄三の遺体は他の親族の意向によって早々に荼毘にふされていた。代々続く名家白鳳家は本家を雄三の兄である雄一郎が継ぎ、白鳳家の行事などは

雄一郎が取り仕切っていた。

元々は京都の公家の三男坊だった白鳳雄仁が、明治時代に関東に移り住み

最初は呉服問屋として細々と商いを始めた。

京都から来た元公家の呉服問屋はたいそう珍しがられ、たちまち評判を呼び店は大きくなった。

大正時代になると手広く商いを広げたのが、今の白鳳家の基礎になったと

麗奈は幼い頃から聞かされていた。

現代では長兄の雄一郎が商社会社を、次男の雄二郎が貿易会社を継ぎ、雄三は外車を主とする

白鳳モーターズを受け継いでいた。

しかし雄三は一族の中でも変り種として見られ、本業だけではあきたらずに

自ら探偵事務所まで開いていたのだ。

「実の弟ながら変わった奴だとは思っていたが、大して金にもならん探偵事務所なんか作って

雄三も一体何がしたかったんだか……」

悪びれることなく漏らす雄一郎に多少の嫌悪感を抱きながら

「さあ、パパが何を考えていたのかは私にもよくは分かりませんわ」
とだけ麗奈は答えた。

「ああ、気に障ったならすまないね。悪気があったわけじゃないんだよ」

「そんな伯父様、お気になさらないで」

弱々しく笑顔を作る麗奈の横で

「ほら！ お兄さんたら、人の気持ちを分らない人だから許してやってちょうだいね」

と叔母の香都子が口を挟んだ。

「人の気持ちが分らないとは何だ」

むっとした顔つきで雄一郎が言い返すと、小さく笑って

「兄さんも香都子もいい加減にした方がいいんじゃないですか。

仮にも今は雄三の葬儀の真っ最中ですよ」

雄二郎が嗜めた。

父雄三の兄弟に囲まれる形で、その輪の中にいる麗奈は居心地の悪さに

つい心の中で

「パパの馬鹿……。こんな居心地の悪い中に私を一人残して死んじやうなんて」

と呟いた。

「ごめんよ……。麗奈」

雄三の声が聞こえた気がした。

「え？」

麗奈は慌ててキョロキョロと辺りを見渡した。

しかし死んだ雄三の姿が、この場所にいるはずもないと思い返すと唇を噛みしめて、もう一度

「パパの馬鹿」

と小さく呟いた。

「だから、ごめんよ」

聞こえた声に目を上げると、麗奈の目の前に透き通った雄三が申し訳なさそうに

頭を何度も下げていた。

「やだ！ うそ？」

絶叫すると麗奈は、そのまま気を失ってしまった。

狭い部屋の中を頼りなくふわふわと漂いながら困惑した顔で、ようやく雄三が口を開く。

「驚かして悪かったね。麗奈。その……、怒っているかい？」

目が覚めても目の前をふわふわと漂っている雄三に悪い夢ではなかったのだと、麗奈はぼんやりとした虚ろな目でただ雄三の姿を眺めていた。

「あの、麗奈……」と雄三が呼びかけると、唐突に

「かなり娘さんは混乱していますね。だから言わんこっちゃない」肩をすくめて首を振ったのは、体長5cmくらいの白い燕尾服を着た小さな男だった。

突然、降って湧いたような男の出現に目を丸くして

「やだ、うそ。何これ？」

麗奈が声を裏返して雄三に聞く。

「こ、これとは何ですか！ コレとは！」

顔を真っ赤にして男が声をあげると、狭い部屋の壁が共鳴してビリビリと鳴った。

体長5cmの体の一体どこからこれほどの大声が出るのだろうと目をパチクリさせながら

「ご、ごめんなさい。それで、あなたはどちら様？」

コホンとひとつ咳払いをし、気を取り直して今度は落ち着いた声で

「わたしは魂の連行係です」

と男が答えた。

「魂の連行係？」

「まあ、人によっては天使と呼ぶ人もいますがね」

麗奈の顔を窺いながら

「彼の名は、エドワードと言ってね。パパのお目付け役なんだ」

と雄三が言った。

さっぱりと訳がわからないと言った顔で、麗奈が首を傾げるとエドワードが

「あなたのお父上は、本来ならとくに天界に行く魂なんですけどね。どうしてもしばらく地上に残りたいと言い張られまして。

わたしの役目上、本当は無理やりにも天界に送りたいところなんです」

と、言いかけてチラリと雄三を見た。

その目つきは『天使』とは言いがたいほど、忌々しげである。

どうやら雄三とエドワードの間には何かしらのひと悶着があったらしいが

今の麗奈にはそこまで問いただす気力はなかった。

大好きな父が目の前にいるのは嬉しいが、幽霊となってしまった雄三に戸惑いがあった。

それでつい、

「パパはいつまで居るつもりなの？」

と聞いてしまった。

「なっ！　麗奈はパパが幽霊になって戻ってきたのは迷惑なのかい？」

思い切り傷ついた顔をした雄三に

「あ、ち、違うの！　そんな意味じゃなくて……」

慌てて麗奈は取り繕うとしたが遅かった。

みるみるうちに雄三の両目に涙が溢れ

「なんてひどい話なんだ。愛する娘のために、この世に戻ってみればその娘に疎まれるとは」

おいおいと声をあげて泣き出した。

「ごめんなさい。パパ、ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったの」

「本当かい？」

強く何度もこくこくと麗奈が頷くと、満足した様子で

「じゃあ、パパがずっと居ても構わないかい？」

猫なで声で雄三が聞くと

「それはダメです！」

エドワードがまた声を張り上げた。

しかめっ面で耳を塞ぎながら、

「どうしてダメなんですか」

恐る恐る麗奈が尋ねた。

「一応ね、お父上の魂がしばらくの間地上に留まることは許可されました。」

ですが、ずっとと言うわけではないのですよ」

苦々しく答えるエドワード。

またさっぱりと分からないという風に麗奈が首を傾げると

「本来天界に行くはずの魂が地上に留まるということは、

その分、魂が削られるということになるのです。

長く居れば居るほど、削られる部分が増えてしまう。

最後には魂、そのものが消滅してしまうことになるのです」

「ええ！　パパが消えてなくなるの」

「ですから、消滅を防ぐためにも地上にいられる時間制限をしております」

エドワードの事務的な説明に、うんざりした顔で

「一日に麗奈のそばに居られる時間は5分間だけ、なんだってさ」
肩をすくめたため息を吐きながら雄三が言う。

「あなたの魂を無事に天界に送るための措置です！

そのための連行係、あなたが無茶をしないためのお目付け役なので
すから！」

また忌々しげな表情で真っ赤になって語尾を強めるエドワードに

「あの、それでエドワードさん？　パパが現れる時は、もしかして
あなたも一緒に？」

「はい。それが何か？」

麗奈は再び困惑した顔で深いため息をついた。

眉間に皺を寄せたまま、険しい顔つきで麗奈が荒くため息をつく
と乳母の絹が

「お嬢様、お疲れですか？　そろそろお帰りになられた方が」と進言した。

「いいえ！　この問題は今、解決の糸口を見つけておかないと。そうでしょう？　局長の衣笠さん」

話を振られた衣笠はしどろもどろになりながら目を泳がせている。丸顔で人の良さそうな男だが、どうも局長というには頼りない雰囲気だ。

殺風景ともいえるほど簡素な室内には、応接用のテーブルセットと事務机がふたつあるだけで寒々しい雰囲気すら漂っていた。

突然、幽霊となった雄三が現れたものの、

あとは何事もなく無事に社葬が終わった三日後。

雄三に促されて『白鳳探偵事務所』に初めてやって来た麗奈だが、父、雄三から受け継いだ探偵事務所がまさかこれほど慎ましいものだとは

夢にも思わなかった麗奈は何度も首を振りながら

「一体、どうしてこのような事になっているのか。説明してもらいたいものだわ」

あまりにも麗奈の態度がピリピリしているので絹は、はたと思い付く。

「お嬢様、また頭が痛むのですか？」

あの事故以来、麗奈は時折襲ってくる激しい頭痛に悩まされていた。事故による後遺症だと医者と言ったが、普段おっとりとしている麗奈が

ひとたび頭痛に見舞われるとまるで違った人格のように

激しい気性になってしまるのが乳母の絹は心配なのだ。

「大丈夫よ、ばあや。これは頭痛なんかじゃないから」

くるりと衣笠に顔を向けると再び厳しい口調で

「さあ。説明してちょうだい。何故、一人も探偵がいないのか」

と麗奈は問いただした。

もごもごと口ごもりながら衣笠は

「いえ、一人もいないという訳では」と答えるのが精一杯のようだ。

「目ぼしい探偵も居ない。腕利きと聞いていた探偵もパパが死んでから休んでいる。」

あとは誰がいるって言うの？」

「そいつは俺だ」

勢い良くドアを開けて、革ジャンを羽織った若い男が事務所に入ってきた。

「まったく、深窓の令嬢ってどんなイイ女かと思えば

キンキンキャンキャンとよく吼える女だぜ」

乱暴な口ぶりの男に怪訝な視線を送ると

「衣笠さん、この方は？」

尋ねる麗奈にぺこぺここと頭を下げ

「あ、あの彼は飯島譲くんと言いまして……」

紹介する衣笠を遮って

「俺もこの探偵なのさ」

と飯島は煙草をくわえながら言った。

「そう、飯島さんとおっしゃるのね。あなたは今までどれくらいの実績がありなのかしら」

「ふうん。俺の実績を知ったところでどうするつもりだい」

「父から聞いていた腕利きの探偵さんは今居ないようだし、見たところあなたはそれほど有能とも言えないみたいだから、これから先のことを考える参考までにお聞きしたいわ」

普段の麗奈では口にしないうようなきつい言葉に、絹は心配顔のまま

麗奈のそばに立ちすくんでいた。

「まったく、口の減らない女だな」

そう言いかけて、飯島が麗奈に詰め寄った瞬間の出来事だった。

どすんと派手な音を立てて、飯島がひっくり返った。

正確には、麗奈が投げ飛ばしたのだった。

「無礼な男ね。立場を弁えなさい！」

腕組みしながら、飯島を見下ろす麗奈を

あっけにと取られて見ていた衣笠に、

「お嬢様は合気道の有段者でございますから」

澄ました声で絹が囁いていた。

「もう、本当に信じられない！　パパったら、一体どういう基準で探偵を採用したの」

ぷりぷりと怒りながら、麗奈が食ってかかると雄三は

「ははは、飯島もさぞかし驚いたろうな。まあ、あいつにはいい薬だ」

と笑ってみせた。

その雄三の態度がまた気に喰わないといった風に

「大体パパが早く事務所に慣れろっていうから行ったのに、肝心のパパは来ないし」

ふくれっ面の麗奈に申し訳なさそうに

「パパだっと一緒に行きたかったさ。だけど、エドワードがね……」
そう言いながらエドワードに恨めしそうに視線を送った。

当のエドワードはと言うと、毛むくじやらの獣に襲われている真っ最中だった。

「あ、あの。お嬢さん、こ、この獣を何とかしてください……」
息も絶え絶えに懇願するエドワードの姿を見るなり、麗奈は吹き出した。

「やだ、うそ。どうして天使が猫に襲われてるの」

麗奈の愛猫ミーシャは、小さな白い燕尾服の天使がいたく気に入っていたらしい。

両前足でしっかりとエドワードを押さえ込み、体中を舐めまわしているところだった。

「ひよっとして天使って、またたびの香りがするのかしら」

「じよ、冗談はやめてくださいよう。私、本当にそのうち食われてしまいそうです」

天使らしからぬ弱音を吐くエドワードに、クスクス笑いながら見入る麗奈に

「やれやれ、麗奈のご機嫌は直ったかな」

雄三が胸を撫で下ろすと、

「それとこれとは話が違います!」

麗奈がまた睨んだ。

雄三が縮み上がり肩をすくめると、丁度いいタイミングでドアの向こう側から

「お嬢様、お目覚めですか」

と絹の声がした。

「ええ、ばあや。そろそろ出掛ける仕度をするわ」

返事を返し振り向くと、もう雄三の姿もミーシャに捕まっていたエドワードの姿も消えていた。

一日に逢える時間がたった五分間だけなんて、短すぎると麗奈は底知れない寂しさを感じた。

雄三が生きていた頃は、ほとんど毎日雄三にべったりしていた麗奈だったのだ。

よく友人達はファザコンとからかったが、麗奈にはそのどこが悪いのか理解出来なかった。

母親を早くに亡くした麗奈を雄三は出来る限りの愛情を注ぎ、守ってきた。

強いだけではなく頭も切れ、ジョークも好きだった雄三は娘の前でも気の抜いた格好は見せなかった。

物腰も洗練されていた雄三は麗奈の理想の男性像でもあったのだ。

最初は幽霊になってしまった雄三に戸惑いもあったが、大好きだった父親には変わらない。

つい数分前の出来事がまるで夢であったかのように

余韻すら残らずきれいさっぱりと跡形もなく消えているのは、やはり寂しい。

絹には明るく返事を返したものの、麗奈の気持ちは少しずつ暗くなり仕度をする手も思うように進まない。

今日は事故に遭って以来、初めて大学に行くと絹には告げてあった。
「それはようございました」

絹はことのほか喜んで、他の使用人たちにも事細かに指示を出していた。

麗奈が気持ちよく目覚め塵一つない磨き上げられたダイニングで吟味された食材で優雅に朝食を摂り

安全で快適な運転で大学に着くまで決して気を抜かないようにとすべての使用人たちに厳しく伝えているのだ。

それは今に始まったことではなく、麗奈が幼い頃からのことだったのだが

今日の麗奈にはいつものことが気詰まりに思えてきた。

しかし今さらやめるというわけにもいかない。

絹や他の使用人たちの心尽くしを考えると、自分の我がままを押し通すのは申し訳なく感じる。

ノロノロと仕度を済ませ寝室のドアを開けると絹が

「お嬢様、本当に大丈夫でございますか？」

と声を掛けた。

にこりと笑って

「もう、ばあやったら心配性なんだから」

さっさと朝食を済ませて大学へ行こう。

麗奈は足早にダイニングへ向った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8948f/>

お嬢探偵レイナ

2010年10月25日19時43分発行